

## [成果情報名]主枝候補枝を有するカンキツ1年生大苗の育成技術

[要約]ウンシュウミカンにおいて、主枝候補枝を2~3本確保した1年生大苗は、6月に春枝を摘心し、BA液剤を散布した後に発生する夏枝、秋枝を管理することで育成できる。一方中晩柑においては、春枝摘心後の夏枝が多く発生するため、主枝候補の確保は容易である。

[キーワード]カンキツ、1年生大苗、主枝候補枝確保、BA液剤

[担当]福岡県農林業総合試験場資源活用研究センター苗木・花き部；苗木チーム、福岡県農林業総合試験場果樹部；果樹育種・栽培チーム

[代表連絡先]0943-72-2243

[分類]普及成果情報

## [背景・ねらい]

カンキツ生産においては、改植に伴う未収益期間の短縮のため、主枝候補枝を有する2年生苗の需要が高い。しかし、2年生苗は掘り上げた1年生苗（棒苗）を露地圃場に再定植し、さらに1年間養成するため、植え替え作業や長期の栽培管理にかかる労力負担が大きく、需要に対して供給不足となっている。

そこで、カンキツ産地から求められている早期樹冠拡大が可能な主枝候補枝を有する大苗について、より短期間に安定的に育成できる技術を開発する。

## [成果の内容・特徴]

1. 主枝候補枝を2~3本確保した1年生大苗は、慣行の1年生苗（棒苗）と同じ期間で育成可能である（図1、図2）。また、1年生の大苗は、2年生苗と比較して掘り上げ回数が2回から1回に減少でき2年目の植え替え作業も不要となる。掘り上げと植え替えに係る作業時間は約1/4に低減できる（データ略）。
2. ウンシュウミカンでは、6月に春枝を摘心し、その後にBA液剤を100倍で散布することで、多くの夏枝を確保できる（表1）。一方、中晩柑においては、春枝摘心後の夏枝が多く発生するため、夏枝は確保しやすい（データ略）。
3. 1年生大苗は慣行の1年生苗よりも地上部の総生育量が優れ、地下部の生育も優れる（表2）。

## [普及のための参考情報]

1. 普及対象：苗木及びカンキツ生産者
2. 普及予定地域・普及予定面積・普及台数等：カンキツ苗生産地
3. その他：
  - ・2年生苗は購入2年前に注文する必要があるが、1年生大苗は前年の注文で入手可能である。
  - ・1年生大苗からは慣行の1年生苗と異なり、翌年に使用する穂木の採取ができないため、別の手段で穂木を確保する必要がある。
  - ・BA液剤の散布効果は、ウンシュウミカンの「早味かん」「宮川早生」「青島温州」にて確認した結果である。
  - ・夏枝、秋枝は、先端から発生する強い枝を2~3本残して管理する。

[具体的データ]

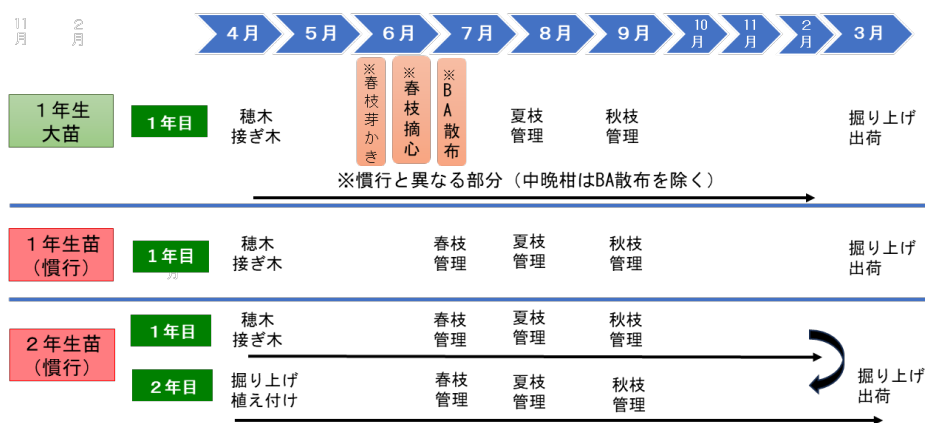


図1 1年生大苗と慣行苗の育苗スケジュール



図2 ウンシュウミカン「宮川早生」の1年生大苗（左）と慣行1年生苗

表1 ウンシュウミカンにおける品種とBA液剤散布による夏枝発生数の違い（2021年）

B A液剤散布	夏枝発生数（本）		
	早味かん	宮川早生	青島温州
処理	10.6	10.8	9.6
無処理	4.2	2.8	2.0
有意差	**	**	**

注) 統計はt検定により\*\*は1%水準で有意差あり。BA液剤は100倍で使用。

表2 「宮川早生」における育成方法の違いによる苗木の生育量の違い（2022年）

樹形	総生育量		部位別生体重	
	新梢(cm)	葉数(枚)	地上部重(g)	地下部重(g)
1年生大苗	183	116	152	69
慣行1年生苗	82	39	109	49
有意差	**	**	**	**

注) 統計はt検定により\*\*は1%水準で有意差あり。令和4年11月1日調査。

(松本和紀・津田宗一郎)

[その他]

予算区分：委託プロ（果樹幼木）

研究期間：2020～2024年度

研究担当者：津田宗一郎、松本和紀、姫野修一、朝隈英昭、松下竜一、竹元秀燿

発表論文等：果樹の幼木期安定生産コンソーシアム（2025）「生産性向上に向けた果樹改植のための良質苗木生産、活用マニュアル」福岡県資源活用研究センター苗木・花き部発行